



可兒丫 E G 新聞



2023年3月31日  
可児YEG発行



総務・広報委員会  
副委員長  
芝田 健二

会社児童工会議所青年部に入会して三年目に入る芝田建二が、僭越ながら思いを綴らせていただきます。

私が起業をしたのは二〇一二年二月、二十四歳の時でした。私は高校を卒業してすぐに自営業の父の事業を手伝いました。しかし、二十二歳の時に、会社の中核を担う事業が突然上手くいかなくなりました。

そして二十八年間の歴史に幕を閉じることになりました。最後の営業日の夜、お寿司の出前を取り、家族みんなで静かに食べ、一本締めをしました。その時、「解散！」と言った父の言葉と表情を、私は一生忘れる事はないでしょう。（そんな父は現在、違う事業を立ち上げ営んでいます。）

自分自身も今後的人生をどうしていくか分からず、落ち込んでいました。それでもここまで育ててくれた父に恩返しをしたいと思い、今の自分にできる事で起業できる事業は何かと考え、二〇二〇年二月、コロナ禍の真最中に今事業を始めました。

会社を作れば、自然に仕事が来るものだと思っていましたが、現実はそんなに甘くありませんでした。起業して三ヶ月はまったく仕事がなく、一人ですっと営業で回った会社の土場の草抜きを続けてい

ました。このままではいけないと  
思っていた時、ある地元の先輩経営者に「商工会議所青年部という団体があるよ」と言  
われました。

地元の先輩経営者の方の輪に入りたかったのもあり、お説  
いの言葉を頂いた時にすぐに  
入る決断をしました。

青年部に入ると、ある先輩  
経営者に「自分の利益の為に  
地域があるんじゃないぞ。会  
社が地域を盛り上げるんだ」  
というお言葉を頂きました。  
強くこの世を生きぬく方々  
の言葉には鈍器で頭をたたか  
れるような、そんな衝撃を受  
ける事が多々あります。

青年部の想いも地域の為に  
何ができるか。受け継がれる  
意思、脈々と続く活動がそこ  
にありました。

ふと夜、目を瞑るとどうし  
たら地域の為、周りの方々に  
喜んでもらえるかを夜な夜な  
考える先輩方の会議の様子が  
目に浮かびます。今年は特に  
そんな熱い先輩方の想いを感じ  
じ取ろうとした一年でした。

そして令和四年度、可児商  
工会議所青年部は蘇った年に  
なったのではないかと、私は  
思います。

二〇二〇年から流行した新  
型コロナウイルスにより、可  
児商工会議所青年部も大きな  
影響を受けました。

…」という言葉や考え方を幾度となく味わってきました。従来のやり方では、新型コロナウイルスの感染を防ぐことが出来ないと、考えなくてはいけない事がかなり増えていました。ただ感染拡大を抑えつつ、地域への想いを「コロナだから…」とくじけることなく、実行できる方法を考え抜いてきました。

色んな経営者との出会い、そして色々な言葉との出会い、そして色々な特大の背中を見てきました。それは今後も続くでしょう。この流れは永久に続くのでしょうか。自分が先輩方に教えていたいた事を、次の世代に受け継いでいきます。

先輩方の優しい瞳の中には、熱く燃え上がる可児夏まつりに対しての想いをひしひしこと感じました。そして苦労と情熱と多くの方の協力によって、念願の可児夏まつりが復活しました。打ちあがった花火を見あげていた全ての人は、「その消えゆく一瞬の輝きに何を想つたのでしょうか。そこに可児商工会議所青年部の存在意義が詰まっている」と思つております。

「見えない物と戦った歳目は、見えない物に支えられた歳月だった」あるCMに使われていた言葉です。そしてその熱い想いは、私たち若い経営者に受け継がれ

感ります。このように、起  
大会の中で見た、コロナ前  
の可児夏まつりの映像に映  
る、お祭りに参加していただ  
いた地域の方々、子どもたち  
の笑顔、それを見た青年部の  
先輩方の横顔が目に焼き付  
つらうございます。

行動に移している先輩方の姿  
が私の心中深く残りました。  
「上手くいかない時にそれで  
も続ける努力を底力っていう  
んだよ。」先日、この言葉が  
SNSでたまたま目に留まり  
ました。先輩方の姿を見てい  
る青年部は良いですよ。  
どこが良いか言い出せばき  
りがないですが、私は大好き  
です。共に時代を生き抜く、  
地元の先輩方や同世代と話す  
貴重な団体です。もしこの文  
文を読んで頂いた方が何か感  
想をお持ちの方は、お手元に  
ある筆記用紙に、お書き下さ  
る事で、喜んでお受けします。

最後に私の一番好きな言葉  
を書かせてください。  
「混沌の時代」にも希望を見出  
し、再生を果たして未来へ向  
かう。そこにきっと夜明けが  
やってくる。」  
人生を生きる全ての方々へ。